

人間の条件としての真正な社会

Authentic Society as Human Condition

木下 聖三

目次

1. 量的概念としての真正性
2. スモールワールドとスケールフリー
3. 枝をつなぎかえるマルチチュード
4. 人間性の回復

1. 量的概念としての真正性

フェルディナント・テニースの「ゲマインシャフト／ゲゼルシャフト」もエミール・デュルケームの「機械的連帯／有機的連帯」も社会集団の質を記述する概念であったのに対して、クロード・レヴィ＝ストロースの「真正性」基準は（「500人の村落か3万人の都市か」という具合に）まずその量に注目する概念であった。ただし、学術の世界に限定するものでなければ、これは必ずしも新しい視点ではない。たとえばアドルフ・アイヒマンの発言とされる、次のような言葉。「百人の死は惨事だが、一万人の死は統計にすぎない」（クノップ『ヒトラーの共犯者 下』[2001：69]）。小規模な集団に対する「真正な」（あるいは「本物の」）という形容も、じつは、同じような悲劇が（それと気付かれないようなやり方で）現在ただ今も繰り返されているのではないか、という問題意識にもとづいた言葉遣いだと言えるのではないだろうか。

レヴィ＝ストロースは（「真正性の水準」に言及したのとは）別のところで

「あるモデルの構成要素が現象と同じ尺度であるとき、そのモデルを『機械的モデル』、尺度が異なるとき『統計的モデル』と呼ぶことにしよう」（『民族学における構造の観念』[1972：309]）とも述べている。これはのちに、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリによって、「分子状のもの」と「モル状のもの」として、描き分けられていくことになるのだけれども（『精神分析と人類学』[2006：313-346]、「1933年—マイクロ政治学と切片性」[2010：95-144]など）、この段になるといよいよ、前者（「真正な」あるいは「本物の」小規模集団、「機械的モデル」、「分子状のもの」）にウェイトが置かれるようになる。

2. スモールワールドとスケールフリー

2000年代に入ると、ネットワーク科学の成果が参照されはじめる。まず、小田亮がダンカン・ワッツとステイヴン・ストロガッツの案出した「スモールワールド」モデルとバラバーシ・アルベルト・ラースローとアルベルト・レーカの案出した「スケールフリー」モデルとを引き合いに出しながら、前者に「真正な社会」の特徴を、後者に「非真正な社会」の特徴を見出している（『真正性の水準』について）[2008：305-308]。ついで、東浩紀が「同じネットワークの異なった水準の特徴を名指す言葉」として、両者（「スモールワールド」と「スケールフリー」）を重ね合わせて見る見方を提示した（『ゲンロン0 観光客の哲学』[2017：182-184]）。

じつはワッツとストロガッツの「スモールワールド」モデルとバラバーシとアルベルトの「スケールフリー」モデルとは重ならないのだが、「スモールワールド」の条件（小さな平均距離と大きなクラスター係数）と「スケールフリー」の条件（次数分布が偏っている）を併せもつモデルが存在することもまた知られている（増田直紀著『私たちはどうつながっているのか』[2007：144-146] 参照）。

頂点と枝とが規則的につながっているネットワークにおいて、一定数の枝をつなぎかえると「スモールワールド」性が現出し、さらにそのさい、接続

先として多くの枝をもつ頂点を優先させると「スケールフリー」性が現出する。さて、増田直紀によれば、「現実の人間関係は、よほど閉鎖的な人々の集まりでない限り、スモールネットワークである」[2007: 145]。しかし、モデルに準拠するかぎり（つまり机上では）、いずれの「スケールフリー」モデルにおいても「小さな距離は容易に実現できる」のだが、「うまく工夫しないと三角形をたくさん入れ込めない」[2007: 146]。ひるがえって、現実には「優先的選択」を押し進めるならば、はたして人間の社会は瓦解してしまうのかもしれない。

3. 枝をつなぎかえるマルチチュード

そうであるとするれば、真正な社会こそは「人間の条件」であると言えるだろう。そして、ハナ・アーレントが「人間の条件〔ヒューマン・コンディション〕というのは人間の本性〔ヒューマン・ネイチャー〕と同じものではない」[1994: 22] と述べているように、真正な社会もやはり、自然に持続するようなものでなく、たえず手入れしなければ消えてしまうような、じつは儂いものであるかもしれないのである。

丸山眞男が特定の目的を有さない（本稿の文脈に合わせて「優先的選択を実施しない」と読み換えることもできよう）持続的な社会集団を「マルチチュード」と呼んでいるけれども（『丸山眞男講義録』[1998: 89-104]）、規定の曖昧さが指摘されているアントニオ・ネグリとマイケル・ハートの「マルチチュード」概念についても、そのように解釈するならば、真正な社会を維持するためのヒントが得られるのではないだろうか。

小田はこう述べる。

〈帝国〉のネットワークとマルチチュードのネットワークとの同一化を避けて、ネットワークの対称性を取りもどすために、それらの親和的な二つのネットワークのあいだに亀裂を入れて差異化することが重要だ…。

（小田「非対称化されたネットワークに亀裂を入れる」[2013: 208]）

〈帝国〉のネットワーク対称性を取りもどすためには、〈帝国〉と同じだけの長い、大規模なネットワークを移動性によってつくり出す必要はない。むしろ、持続的な「コモン＝〈共〉」をつくり出すことによって、その場にとどまりながら「脱出（エクソダス）」することが可能になる。

（小田「非対称化されたネットワークに亀裂を入れる」[2013：208]）

東はこう述べる。

ぼくが本書で提案する観光客、あるいは郵便的マルチチュードは、スモールワールドをスモールワールドたらしめた「つなぎかえ」あるいは誤配の操作を、スモールフリーの秩序に回収される手前で保持し続ける、抵抗の記憶の実践者になる。

（東『ゲンロン0 観光客の哲学』[2017：186]）

東はまた、「帝国の体制にふたたび偶然を導き入れ、集中した枝をもういちどつなぎかえ、優先的選択を誤配へと差し戻す」、「そのような再誤配」が必要だとも述べている（『ゲンロン0 観光客の哲学』[2017：192]）。

丸山のマルチチュード観と二人のそれは共鳴していよう。

4. 人間性の回復

さてしかし…。枝を切ったり接いだりするだけの余力がない人間は、いったいどうしたらよいのだろうか。「関係は祝福であり呪いであり、天使であり悪魔でもある」と述べる安田雪はこう続ける。

…われわれは人に与えられ、人に与え、人を傷つけ、人を癒やし、人を助け、人を苦しめながら。人々と関わり続けていくしかない。

人との関係は忘却、あるいは本当に強い一部のものは、死によってのみ完結するのだろう。…死もまた、死者と残された者との関係を、後者にお

いて結び付け直し再定義させる。それもまた、橋を架けなおすことである。

(安田『「つながり」を突き止める!』[2010: 248])

ここで話が私事に渡るのが、私に目を掛けてくれた職場の先輩が3年前に亡くなった。私より30ほど年配のその先輩は、その先輩らしく最後に私物を整理していかれたのだが、紐状のキーホルダーだけがおそらくは処分し忘れられていた（これもその先輩らしい）。たいへん勝手ながら、私はそれを形見として、いまでも自分の鍵に付けさせてもらっている。

生前、先輩は荒い運転を嫌う方だったので、私は車を運転するとき、いまなお、いや以前にまして先輩の目を気にし続けている。「おかげで今日も無事です」と思うのは比較的合理的である気がするし（なぜならじっさいスピードが落ちているだろうから）、怪我を負ったときには先輩に叱られる気がしてしまうのもそれほど非合理的な理路ではないだろう（じっさい充分なマージンを取っていなかったのだろうから）。

ここでほんとうに大事なのは、そういう（コミュニケーションならざる）コミュニケーションによって、交通事故が減る（したがって動物としての生存可能性が高まる）ということではなく、安田の言葉を借りれば、橋が架けなおされる（人間的な生活の余地が確保される）ということのほうである。話をネットワーク科学の諸モデルに戻すと、そうしてクラスターがヴァーチャルに回復され得るのだろう。

このとき、「ゲシュテル」（マルティン・ハイデガーによって論じられたこの用語は「集立」あるいは「総駆り立て体制」と訳される）の中で遺棄されたキーホルダーは、先輩のお人柄まるごとが保存された「断片」と化しているのだろう。

あらゆるホログラムがそうであるように、残された断片には全体のイメージと完全な表象が保存されているのです。

(レヴィ＝ストロースが自らの老境について述べた言葉。

渡辺公三著『闘うレヴィ＝ストロース』[2009: 259] より)

私はキーホルダーを手にして、少しだけ人間らしくなれた気がしている。いま少し一般化するならば、各人の器量に応じて、基本的にはアクチュアルに、ときにヴァーチャルにでも、人間関係を結んでいくのが、人間が人間であるための方途なのだろう。そのさい、接続先として多くの枝をもつ頂点を優先させないこと、丸山の定義に戻れば、特定の目的を志向しないこと、言葉を変えれば、下心を持たないことが肝要となろう。

参考文献

東浩紀

2017『ゲンロン0 観光客の哲学』ゲンロン

アーレント (Hannah Arendt)

1994『人間の条件』(志水速雄訳) ちくま学芸文庫

小田亮

2008「真正性の水準について」『思想』12月号

2010「構造でシステムを飼い慣らすということ」『現代思想』1月号

2013「非対称化されたネットワークに亀裂を入れる」『現代思想』7月号

クノップ (Guido Knopp)

2001『ヒトラーの共犯者 下』(高木玲訳) 原書房

ドゥルーズ／ガタリ (Gilles Deleuze/Félix Guattari)

2006「精神分析と人類学」『アンチ・オイディプス 上』(宇野邦一訳) 河出文庫

2010「1933年—マイクロ政治学と切片性」『千のプラトー 中』(宇野邦一ほか訳) 河出文庫

増田直紀

2007『私たちはどうつながっているのか ネットワークの科学を応用する』中公新書

丸山眞男

1998『丸山眞男講義録 第三冊 政治学 1960』東京大学出版会

安田雪

2010『「つながり」を突き止めろ 入門！ ネットワーク・サイエンス』光文社新書

レヴィ＝ストロース (Claude Lévi-Strauss)

1972『構造人類学』(川田順造ほか訳) みすず書房

1976『野生の思考』(大橋保夫訳) みすず書房

渡辺公三

2009『開うレヴィ＝ストロース』平凡社新書